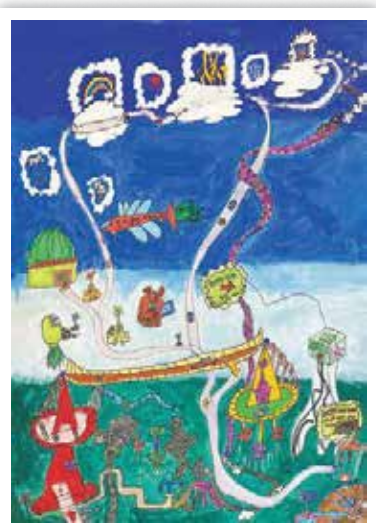


未来の富山市

小学生絵画最優秀賞

●三四年生の部



「カラフルな富山市」
富山市立新庄小学校4年 堺 春仁 さんの作品

小学生絵画優秀賞

●三四年生の部



「本当の海の中の水族館」
富山市立新庄北小学校3年 祖川 光玲 さんの作品

●三四年生の部



「しぜんの富山市」
富山市立大広田小学校3年 野田 咲恵 さんの作品

●五六年生の部



「富山湾を進む」
富山市立芝園小学校6年 浅木 莉奈子 さんの作品

●五六年生の部



「つながる☆富山市」
富山市立藤ノ木小学校6年 伊勢 桜依 さんの作品

●五六年生の部



「雲の上の富山市」
富山市立浜黒崎小学校6年 石黒 月菜 さんの作品



とき 令和5年8月1日(火) 午後1時30分
ところ 富山国際会議場 3階メインホール

主催/富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

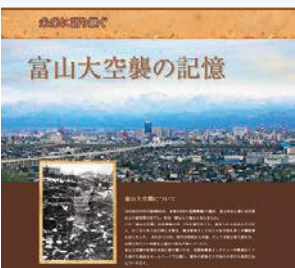
- | | | |
|---------------|----------------|---------------|
| 富山市自治振興連絡協議会 | 富山市社会福祉協議会 | 富山市遺族会 |
| 富山市老人クラブ連合会 | 富山市民生委員児童委員協議会 | 富山市児童クラブ連絡協議会 |
| 富山市母親クラブ連絡協議会 | 富山市PTA連絡協議会 | 富山市小学校長会 |
| 富山市中学校長会 | | |



HPIはこちらから

未来に語り継ぐ 富山大空襲の記憶

富山大空襲の記憶を未来に語り継ぐため、空襲体験者インタビューや戦禍をくぐり抜けた遺品をホームページで公開し、戦争の悲惨さと平和の大切さを後世に伝えていきます。



このプログラムは再生紙を使用しています。

「生かされて(もらった命)」

諏訪 紀子

〔令和四年七月寄稿〕

新聞に目をやるとコロナで中止になっていた花火大会が鎮魂を思い、平和を願う思いから、今年は三年ぶりに行われる事を知り、日頃忘れていた戦争当時を思い出しました。ウクライナの惨状を知るにつけ、日々平凡に暮す私達にも、日本そして富山にも戦争と云う忘れられない時がありました。

昭和二十年八月二日未明の大空襲です。私は六才、夜中空襲警報で起され、急いで外に出てみると、駅前方面、西田地方方面は、真赤に焼け、一旦家に物を取りに入ろうとしましたが、いままで寝ていた部屋は焼夷弾が落ちたのか火の海で、そのままおじさんに背負われ松川へ、松川に入ると沢山の人がフトン水を水につけ、頭からかぶって動きません。

空から無数の白いものが降って来て、それが紫色の光となり、川面に浮んでいるのです。

リンが焼いていたのだと…。私達も川につかっていると父子が「すみません」と私たちが一步下り親子が一步前に出たとたん、私の目から見えなくなりました。飛んだ様に見えました。焼夷弾の直撃を受けたのだと後で分かりました。ほんの二瞬のことでしたが、あの親子は私達の身代わりになったのだと思います。時々思い出しますが、今あるのはあの親子からもらった命だと。

川から上ると綿入れの着物は、あつと云う間に周りの熱で乾き、呉羽に向う為富山大橋を渡る時、河原には助かった人や大分けがをした人達沢山の人が集っているのを見ました。

昨年仲間と氷見方面に行った時、当時を知らない若い友が島尾海岸に、富山の空襲で亡くなり流れ着いた人々を供養

した塔があると案内してくれました。こんな遠くまで流されて来たのかと思うと…。そして遺体を集めて供養された地元の方々を思い当時のことを改めて思いました。

一晩で沢山の人々が亡くなり、街は県庁、電気ビル、大和の建物が形だけ残し焼野原に。皆、普通に生きていたのに、戦争は何も残さない、人の命も形あるものもすべてなくしてしまうのです。悲しみだけを残して。

それでも人は苦しみ、悲しみをいだきながらたくましく前を見て生きて来たのです。

なにげなく 過ぎ去し時
今しみじみと 生をよるこぶ

※この本からいただいた原文を尊重し、掲載しております。

「自分にできること」

富山市立藤ノ木中学校三年

辻

あさの

「平和な世の中を築くために自分に何ができるのだろう。」私は総合的な学習の時間での「平和学習」をきっかけに、こんなことを考えるようになりました。

一九四五年八月十五日「終戦の日」を迎えるまで日本は約八年間戦争をしていました。その間に、日本はたくさん空襲を受けました。富山大空襲では市街地の九割以上の建物が燃え、約二千七百人の人が亡くなりました。

戦争中は食べ物がなく人々は苦しい暮らしを強いられ空襲から逃れるために子供は親と離れて暮らさなければなりません。戦争はたくさん命を奪い、たくさんの人を苦しめます。戦争で日本が受けた被害の大きさを知り、「日本は戦争の被害者」「もう被害を受けないようにしたい」そんな思いが私の中に残りました。

でも、富山大空襲を経験された方のお話を聞いたことをきっかけに新たな事実を知りました。私たちに力説されたのは「日本は戦争の被害者であり、加害者でもある」ということでした。そして最後に、戦争の愚かさ平和の尊さを、次の世代に伝えて欲しいと私たちにお願いされました。私は今まで、日本が受けた被害にばかり目を

向けていましたが、日本も他の国を攻撃し、たくさん人の命や夢を奪った加害者であることを忘れてはいけない、そして私たちは、二度と同じ過ちを犯してはいけないと強く思いました。

私たちは毎日温かいご飯を食べ、将来の夢を語り、家族と生活できています。そんな毎日に感謝すると共に、平和の糧を受け継ぎ、次の世代に渡すという大きな役目を果たさなければならぬと思います。

三月に「富山・金沢こどもサミット」が行われました。私たち中学生の代表が参加し、よりよい未来をつくるために意見を交わしました。そこで出された宣言書には、誰にとつてもよりよい未来となるために私たちができることが示されていました。その一つに、他者との違いを理解しあうことがありました。私はそのことは誰もが自分らしく生きていくために重要だと思ったと同時に、「平和」のために自分たちができることでもあると思いました。

今も世界では戦争や紛争が起きており、多くの人が苦しんでいます。一人一人の力は小さくても「平和」のために自分ができることを見つけ、実践していくことは大切だと思います。私はこれから、他者との違いを理解し、尊重しあうこと以外にも、「平和」のために自分ができることを見つけていきたいと思えます。そして、富山から「平和」を広めていきたいです。

「未来の担い手として」

富山市立真羽中学校三年

岡崎

颯希

私は、今住んでいるこの町が大好きだ。今日まで発展を続け、豊かな生活を送っている私達にとって、こ富山で富山大空襲があったこと等、想像もつかない。

一九四五年、八月一日。アメリカ軍の大規模爆撃機が富山市中心部に焼夷弾を投下した。市街地の九十九%以上が焼きつくされ、被災者が十一万人を超え、大きな被害となった。当時の写真を見ると、多くの建物が崩れ落ち、現在の富山では考えられないような光景が広がっていた。

先月、各国の首脳が広島県に集まり、G7サミットが行われた。私はその事前会議であるG7富山・金沢こどもサミットの意見交換会に学校の代表として参加した。自分以外の様々な人の意見や考えに触れることで、視野が広がり、新しい発見をたくさんすることができ、素晴らしい機会となった。この意見交換会では私達の今後の未来のために何を実行するのかをグループごとに宣言した。特に私が心に残った宣言文は、「住みややすく、誰もが誇れる町をつくる」である。この宣言文に触れた時、私はこの町にあるたくさん魅力や伝統文化を自分達の手で未来につなげていきたいと強く思った。そのように感じた大きな理由の一つが地域の祭である「獅子舞」だ。私は子供の頃から獅子

舞が大好きで、この時期になると父の練習する姿を間近で毎日のように見ている。これまでコロナ禍が続く、思うようにできなかったが、今年、三年ぶりに開催された。久々に地域ににぎわいが見られ、私自身も心踊るうれし気持ちになった。今この時の明るく楽しい景色を未来へつなげていくため、現在を見る側だが、いつの日か担い手として地元の誇れる伝統の祭を受け継ぎ、盛り上げていくことが私達の役目だと感じた。

もう一つ、この先大切にしていきたいと思った宣言文がある。それは、「多様性を受け入れ、他者を理解・尊重する」である。これまで社会科学の授業で様々な「戦争」について学んできた。戦争の一つの原因として意見や考え方の対立が挙げられる。先ほど書いたように、「多様性を受け入れ」というだけでは争いの解決法にはならないだろう。しかし、自分とは異なる見方に触れ、実際に体感することで他者を理解・尊重することができると思う。この宣言文で今も起きている争いを必ずしもなくせるとは限らないが、未来の担い手である私達一人一人がこの宣言文のように、お互いを認め合い、高め合える関係を築くことが、今の社会の一番の目標だと私は感じた。

この先も明るく平和な未来をつくるために、私は、先人から受け継いだバトンを未来のためにつなげられるよう、自分の町、この平和な町を大切に、守っていききたい。

式典



1. 富山市の紹介映像

2. 国歌斉唱

3. 黙とう

4. 開会あいさつ

富山市長 藤井 裕久

5. 中学生作文最優秀作品の発表

「自分にできること」 富山市立藤ノ木中学校3年 辻 あさの

6. 富山大空襲体験文の朗読

「生かされて(もらった命)」 諏訪 紀子

朗読/声のライブラリー友の会 高木 公美

7. 代表献花及び一般献花

演奏/レーベン弦楽四重奏団

第1ヴァイオリン 渋谷 優花

第2ヴァイオリン 藤田 千穂

ヴィオラ 嶋 志保子

チェロ 富田 祥

8. 閉会あいさつ

富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会 会長 北岡 勝

「未来につながるコスモス」

富山市立北部中学校一年

馬場

春佳

一九四五年八月一日は富山大空襲があった日です。空襲では約三千人が亡くなり、たくさん人の心や体が大きな傷を受けました。焼けた面積は富山市街地の約九十九・五パーセントにもなりました。

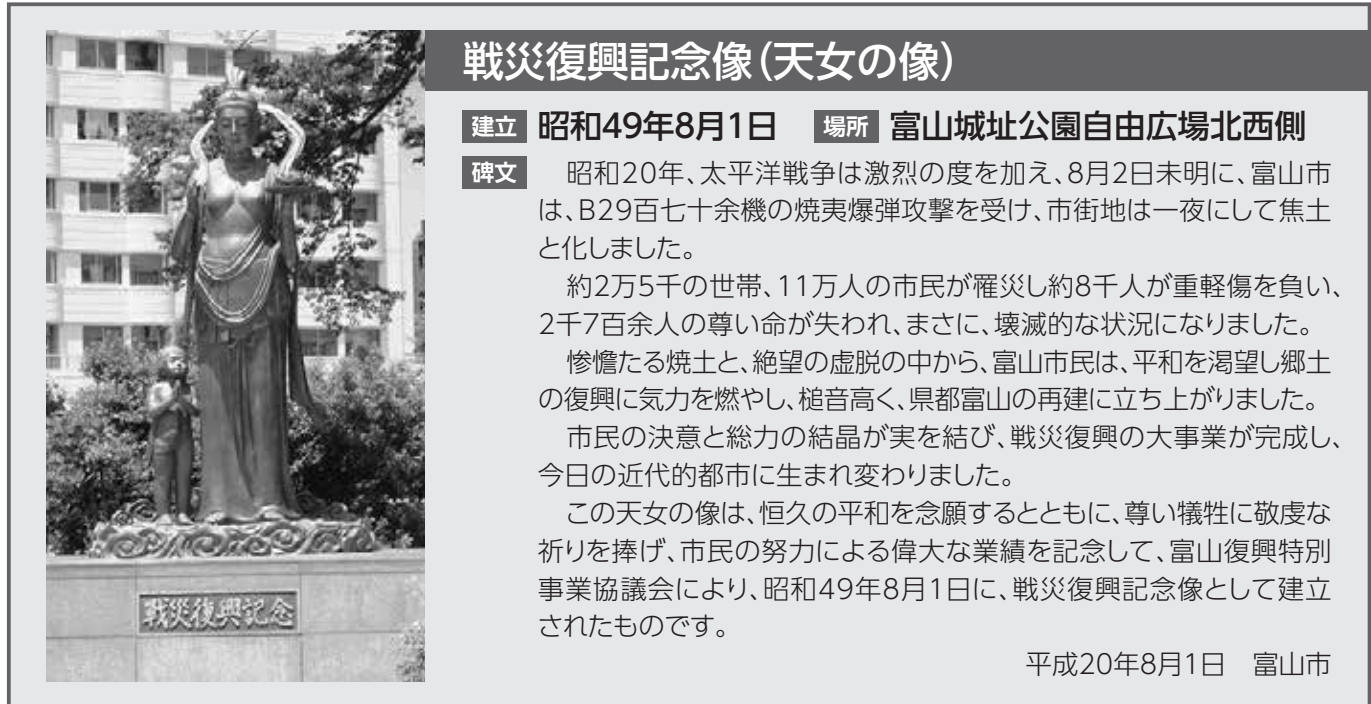
小学校六年生のときの学習発表会では、富山大空襲についての劇をしました。題名は、「あの日と コスモスと ぼく」です。実際に作者が富山大空襲を体験したことを書いた本が基になっています。主人公のぼくは、富山大空襲を体験し、火の中を必死に逃げました。別行動をした姉一人と兄一人を探しても見つかりませんでした。それでも、辺り一面焼け野原となった富山を明るくしようと復興に立ち上がる人がいました。私は、その本と劇がきっかけで富山大空襲のことを知ることができました。そしてそれがただだけ大変で辛かったのかも知りました。

この劇を通して学んだことがあります。焼夷弾などによる建物や家の破壊、大切な家族を失ってしまう人もたくさんいたでしょう。また、まちをやり直そう、作り直そうと思ってもお金がなく、人手が足りなかったときもあったと思います。そんな辛くて苦しい中でも富山を復興しようとした方達に合つて努力をしてきて下さった方達に感謝を伝えたいです。私は、どんなに辛いことがあっても下を向かず立ち

上がるのが大切だと考えます。そして、新しく一歩を踏み出す決心も大事だということに気付かされ、学びました。

今の富山は昔の人達の苦勞の末にあると思います。だからこそ、昔の人達がつないできた、平和な今を創り、平和な未来を願うことが、今の私達にできることではないかと考えます。富山は苦しみながらもつながられてきた戦争への悔しい思いと、それに立ち向かう思いがあるから今はどんな平和になつていきます。富山がさらに発展を続け、未来へとたくしていければいいなと思います。一人一人が協力し合い、助け合うことで、強く、大きく、明るい富山をつくりだせると思います。

劇を終え、卒業式の日には担任の先生からコスモスの種が配られました。コスモスの花は劇の主人公のぼくの姉が、富山が、みんなが明るく元気になるようにとという願いを込めてまいています。その姉のように、私もコスモスの花の種をうえました。このコスモスが元気に成長し、秋になったら明るく咲いてほしいと思います。その笑顔が咲くような花で少しでも笑えるようになってほしいです。そして、咲いた後には種をまたうえていきたいです。それをくり返すたびに、毎年富山がさらに進化をとげ、明るくなることを願います。そこから、富山大空襲で亡くなられた方の数以上の花が咲き、富山はこんなに成長して明るくなったということがみんなに伝わるとうれしいです。



戦災復興記念像(天女の像)

建立 昭和49年8月1日 **場所** 富山城址公園自由広場北西側

碑文 昭和20年、太平洋戦争は激烈の度を加え、8月2日未明に、富山市は、B29百七十余機の焼夷爆弾攻撃を受け、市街地は一夜にして焦土と化しました。約2万5千の世帯、11万人の市民が罹災し約8千人が重軽傷を負い、2千7百余人の尊い命が失われ、まさに、壊滅的な状況になりました。惨憺たる焼土と、絶望の虚脱の中から、富山市民は、平和を渴望し郷土の復興に気力を燃やし、槌音高く、県都富山の再建に立ち上がりました。市民の決意と総力の結晶が実を結び、戦災復興の大事業が完成し、今日の近代的都市に生まれ変わりました。

この天女の像は、恒久の平和を念願するとともに、尊い犠牲に敬虔な祈りを捧げ、市民の努力による偉大な業績を記念して、富山復興特別事業協議会により、昭和49年8月1日に、戦災復興記念像として建立されたものです。

平成20年8月1日 富山市